

第 57 回 2014 年の出来事から ～台風、火山噴火そしてエボラ出血熱～

数十年前から早朝の入浴習慣があるが、最近時々入浴中に風呂場の窓を開け放したまま北の空を眺めながらとりとめなく考えごとにふけることがある。我が家は市街中央部から北西数キロのところであり、近くには大学病院があるような比較的閑静な環境である。浴室の窓からは広々とはいえないまでも北の空が望見できる。晴れた朝など近くの古寺のあたりからよく鳥の鳴き声が聞こえる。時折何種類かの小鳥の鳴き声があるが、なかでもスズメとは違う鳴き声はヒヨドリであろうか。今年の晩春自宅ベランダにその一羽の死がいが横たわっていたこともあった。

閑話休題。

2014 年も余すところ 2 カ月足らずになってしまったが、今年のこれまでを顧みると、前回の本稿で取り上げた「酷暑の夏」ばかりでなく、とくに記憶につよく残っているのは、日本上陸の大型台風、御嶽山の噴火、そしてエボラ出血熱流行の脅威などである。

これまで筆者の記憶にある台風は、伊勢湾台風(1959 年)、洞爺丸台風(1954 年)、狩野川台風(1958 年)など固有名詞のついたかなり昔のものが多い。なかでも伊勢湾台風は、1959 年本州南海上で急速に発達して本州を直撃して縦断し、大規模水害によって 3,000 名以上の死者を出したとされる。近年わが国の防災対策の進歩・充実により、多数の犠牲者を残して去っていくような台風は少なくなったが、今年の台風は筆者のこれまでの記憶にはないような大きなもので、多数の人命が失われるような危険性が連想されたのである。調べてみると 2014 年に太平洋の北西部で発生した台風(熱帯低気圧)は 12 個(2014 年 11 月現在)であったが、これは平年の 7.7 個を上回っている。それらのなかで 7 月発生の台風 8 号は大型で、九州に上陸して日本列島南岸を進み、強風に加えて梅雨前線を刺激して広範囲に大雨による被害をもたらした。7 月末に発生した台風 11 号も強い勢力を保ちながら 8 月 10 日に高知県に上陸し、四国横断後日本海を北上して広範囲に大雨をもたらした被害を及ぼした。10 月上旬に発生した今年最も強い台風 19 号は、フィリピンの東で中心気圧が 900hPa と今年発生した台風のなかで最も下がっており、一時的ではあるが大型で猛烈な台風となって沖縄本島を通過後、鹿児島県枕崎市に上陸し、その後日本列島を縦断する進路をとったため広範囲の大雨や暴風のため、各地に大きな被害をもたらした。

台風の発生数からみると最近では 2004 年に台風発生数 29 個のうち 10 個が日本へ上陸し、集中上陸数で最多であったが、大被害をもたらした大型台風が多く上陸したことは今年が台風の当たり年といえる。地球温暖化がますます進み、また今年のような日本上空の偏西風の流れが続くとすると、来年はどうなることであろうか。

2014 年のわが国の大きな出来事のひとつに長野県と岐阜県にまたがる御嶽山の噴火がある。この山は、東日本火山帯の西端に位置する複合成層火山で、標高が日本で 14 位の 3,067m の大きな裾野を広げる独立峰である。御嶽山が 2014 年 9 月 27 日 水蒸気爆発（水蒸気噴火）で噴煙高度は火口から最大 7,000m と推定された。この山は、1979 年（昭和 54 年）にも水蒸気爆発をおこしたが、その以前においては火山学者をはじめ一般にも死火山と認識されていたが、その噴火をきっかけとして日本国内における火山の分類（死火山、休火山、活火山）そのものが見直されるに至ったとされる。現在では「活火山」以外の用語は使用されない。

今回の御嶽山の噴火では、1991 年の雲仙・普賢岳噴火の際の死者数 43 人を超え、戦後最悪の 57 人となり、行方不明者も 7 名となった。前兆現象として噴火の約 11 分前と噴火直後の約 30 分間に北東に 11km 離れたところで高感度地震観測網火山性微動が観測されていたほか、7 分前には傾斜計で山体が盛り上がる変位も観測されていたという。噴火後大規模な救助活動が行われたが、10 月 16 日、山頂付近での積雪などにより二次災害の危険が強まったとして同日で捜索が打ち切れ、捜索再開は 2015 年春以降の見通しとなった。

活火山の用語は、現在では「概ね過去 1 万年以内に噴火した火山および、現在活発な噴火活動のある火山」（日本の火山噴火予知連絡会・気象庁による定義）とされており、日本の活火山数は 110 火山で、ランク A（特に高い活動度）13 火山、ランク B（高い活動度）36 火山、ランク C（低い活動度）38 火山、対象外（データ不足）23 火山などとされている。現在日本のランク A の火山は、十勝岳（北海道）、樽前山（北海道）、有珠山（北海道）、北海道駒ヶ岳、浅間山（群馬県・長野県）、伊豆大島（東京都）、三宅島（東京都）、伊豆鳥島（東京都）、阿蘇山（熊本県）雲仙岳（長崎県）、桜島（鹿児島県）、硫黄島（鹿児島県）、諏訪之瀬島（鹿児島）などである。

活火山のひとつである宮城県と山形県にまたがる蔵王山（1841m）は、筆者にとっても忘れがたい山のひとつであるが、この山は、有史以来昭和 55 年（1940 年）小規模噴火まで 39 回噴火したことが知られており、今年 10 月には火山性微動と「お釜」とよばれてる火口湖面に白濁が見られたということである。蔵王山の火山活動が活発化していることが推測される。

西アフリカにおいて大流行しているエボラ出血熱は、エボラウイルスによる急性熱性疾患であるが、感染者の血液や体液との接触によりヒトからヒトへの感染が拡大し、今回はこれまでの流行よりも多数の死者を出している。2014年3月頃から西アフリカのギニアで集団発生が始まり拡大し、隣国のリベリア、シエラレオネへと拡大して西アフリカでの感染拡大が進み、2014年10月には10,000人以上の感染が確認されている。エボラ出血熱対策に世界保健機構(WHO)、アメリカ疾病予防管理センター(CDC)、欧州委員会(EU)、西アフリカ諸国経済共同体(ECOWAS)、国境なき医師団(MSF)、平和部隊、赤十字社(IFRC)などが財政的・人的支援に乗り出したが、患者は増え続けている。2014年世界医師会(WMA)ダーバン総会では「エボラウイルス病に関する緊急決議」がなされ、ヘルシンキ宣言第37項「臨床における未実証の治療」も採択された(日医ニュース第1276号)。アメリカ人の感染・死亡や医療支援従事者の感染もあり、アメリカ途上国支援団体の平和部隊はボランティアの撤退を決め、CDCは渡航自粛勧告を行った。2014年8月8日WHOは、西アフリカにおけるエボラ出血熱の流行は「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態」であると宣言した。エボラ出血熱はいまやヨーロッパやアメリカにも感染がみられるようになった。日本においては10月下旬、リベリアに8月から2カ月間滞在していたカナダ国籍のジャーナリストの男性が羽田空港に到着した際に37.8℃の発熱が確認され、国立国際医療研究センターに搬送されて採取した血液などを国立感染症研究所に送り感染の可能性を検査したがエボラウイルスは検出されなかった。

エボラウイルス感染がわが国でも現実となるのはそれほど遠い将来のことではないと危惧されるのである。わが国の緻密で堅固な防災体制の構築が熱望される。